

ドキュメンタリー映画

# 百姓の 声の

とは、どんな映画か

話題の映画『百姓の百の声』(柴田昌平監督)が11月、いよいよ封切りとなる。詳細は『現代農業』誌上の監督の連載(9月号)をご覧ください、ここでは一足先に見た人からの推薦文やコメントが届いているので掲載する。  
農に少し興味はあるが、農家はなんとなく遠い……。そんな人にも、この映画で「百姓スピリッツ」が届くと思つ。農文協も制作に全面協力した。

まごめ 編集部

お

百姓さんは、なぜこれほどまでに強くて賢いのだろう。

目の前の自然をくまなく観察し、自分の頭で思考し、先人たちの智慧と、農家同士で得た情報を絶えず学びながら、自らの肉体を使つて労作する。太陽の光でピカピカに輝く彼らの表情を見ながら、農的営みは、人間を最も人間たらしめるものだと思つた。

彼

らは、ひと粒の種が、何千倍、何万倍に増えるいのちの仕組みとその不思議を知っている。いのちは繊細であっても、やわではない。ほんのわずかでも可能性があれば、生きる方向へと向かう。日々、そのいのちを相手にしているお百姓さんたちもまさに同じだ。現代社会がつくり出した経済やルール、汚染や破壊があつても、その隙間から根を伸ばし、利用できるものを利用し、新たな発想を生み、変化し続ける。強さと賢さはさらに増していく。

おもしろかったです。消費者仲間でも福島に行ったときもいつも思うんだけど、農家の方の話って、すごく元気が出るんですよ。この映画も同じで、いろいろあるだろうに、ああいうふうに向きにポジティブに話す姿に、食べ手のほうがしっくりしなくちゃっていつも思われる。

映画全体を俯瞰する間もなく、次々出てくる農家一人一人を夢中になって見ました。この人のこの言葉素敵!とか、この人カッコイイ!とか、そういうことの連続で……。

タネをつなぐとか、技術を共有するとか、自分ひとりが幸せになるんじゃなくて、みんなでつながろうとしてるんだということに、改めて感動しました。

農家の人たちの考えることって深い。その言葉が深いぶん、国の政策が浅はかなーってことが際立ってくる。

「ただの風景」だった農家という人が  
画像の中から出てきて動き始めた、  
ただの商品だった米や野菜に目や口がついて  
しゃべり始めた、という感覚を持ちました。

- こちらの想像をゆうに超えていい映画だった。現代版「忘れられた日本人」といってもいいのでは。
- 農業やってる人なら、登場人物の言葉とか行為に共感できることも多いのではないかと。若梅さんの農家人生観、山口さんの「主役はキュウリ、俺らはお手伝い」発言、横田さん父の教育観とかに、「そうそう、俺もそう思いながらやってるよね」という感覚。
- 「担い手」「スケールメリット」「選択と集中」といった日本の政策と「小農を見直す世界の潮流」の対比、「農家の観察眼」「米ヌカ」「土ごと発酵」「タネとりは百姓・人類の共有財産」といった『現代農業』が大切にしているキーワードがいい感じの温度感で織り込まれていたように感じた。映画の構成としても秀逸かと。

映像がきれい。印象的な農の風景もたくさん出てくるし、  
農家の強烈な個性を説明あともわしで見せつけてくれるし、  
一言でいうと「農家を浴びるような体験」をしてもらえ、  
他にはない映画と思いました。

タネは、長い歳月をかけて更新されてきた農民の努力の結集であり、独占するのではなく、共有していくことが、行く行く危機回避につながるという。同様に、お百姓さんひとりひとりの肉体に、何世代にもわたり試行錯誤を繰り返しながら引き継がれてきた農民の記憶や技術、哲学が宿っている。

## 柴

田監督の開かれた知と情熱は、個々のお百姓さんに蓄えられてきた膨大な叡智にアクセスすることを

試みた。「批判」「対立構造」「問題解決」などという安易な提示に慣れきっている私たちに、この世界は、もっともっと複雑で奥深く、それを理解し創意工夫するお百姓さんの喜びや面白さを伝える。日本の農業の厳しい現状を想像しつつも、ひとりひとりの姿を見ていたら力が湧いてきた。百姓国の「知」の扉は、これからの私たちの厳しくとも陽の射す明るい道へ続いていることを確信した。 續籾あや（映画監督）

### 『百姓の百の声』 上映情報

11月5日(土)～ 東京・ボレボレ東中野

11月25日(金)～ 京都シネマ

11月26日(土)～ 大阪・第七藝術劇場

以降、全国でロードショー。上映館は公式HPでお知らせします。映画館のない地域では自主上映会の開催もお願いします。

★「百姓の百の声」公式ホームページ

<https://www.100sho.info/>

★クラウドファンディングサイト(ご協力お願いします)

<https://motion-gallery.net/projects/100sho>

監督：柴田昌平 / 制作・著作・配給：プロダクション・エイシア  
制作協力：(一社)農文協 / 2022年 / 130分

